

書 評

『くすりとエビデンス : 「つくる」+「つたえる」』

津谷喜一郎、内田英二／編著

東京 中山書店 2005.3

2005年3月25日発行

A5版 271p 定価 3,570円



本書は、『EBM ジャーナル』創刊号より24回にわたり連載された「くすりとエビデンス」を加筆・修正し、EBM ライブラリーシリーズとして出版されたものである。EBM に関する書籍は多いが、いわゆる狭義のEBPではなく薬との関連で広く論じたものは少ない。表面的には、執筆者が多く一貫性には欠けるが、各々の専門性を活かし、かなり突っ込んだ詳しい内容となっている。

Part I 「エビデンスをつくる」では、医薬品についての臨床試験、治験、統計ガイドライン、民族による違い、そして法律、倫理に至るまで、具体的に示されている。図書館員の読者には「つくる」意味が現場の新しい方向性と共に、とても新鮮に感じることができる。

Part II の「エビデンスをつたえる」は、図書館員の本領発揮の分野である。EBM が脚光を浴びて、図書館での「つたえる」仕事が見直されている時期である。このパートでは、酒井由紀子氏の「大学医学図書館員の役割」、河合富士美氏の「病院図書館員の役割」、小田中徹也氏の「エビデンスと著作権」が、図書館員の立場で登場している。また、山崎茂明氏の「EBM 時代の総合医学雑誌」も薬剤広告との関連で興味深い。その他に、各種データベース比較や診療ガイドライン、システムティックレビューなどの話題、また ICD-10 と MeSH 対応表など細かい資料もあり、充実している。常に利用者者に最適のサービスを提供しようと日々努力している図書館員や情報専門職は、「つくる」から「つたえる」「つかう」までの一連の流れにおいて、それぞれ利用者を介して関わってきた。これからはますますチャンスが広がるだろう。

現在、Part III に当たる「エビデンスをつかう」は『EBM ジャーナル』誌に連載中であるが、医療の専門家だけでなく患者や一般市民も含めての「つかう」が期待される。蛇足ながら、本書表紙の意図するところはわからなくもないが、意表をつく。

(文責：奥出 麻里/JFE健康保険組合 川鉄千葉病院図書室)